

極東動乱 出先外交経験秘話

葛藤するロシア、中国、韓国、日本

林権助（岩井尊人編著）

書肆心水

目次

序に代える 15

第一部 就職以前

生い立ち

永宝屋の話 20

日新館の話 21

伏見の役の話 22

会津籠城の話 23

南部蟄居の話 25

母の英断、出京の話 26

児玉実文少佐に養われる話 26

川上操六割腹の留男となる話 27

城山

西郷帰国の話 29

鹿児島騒動見物の話 30

城下を避難する話 30

屍体を担いで戻った話 31

土百姓になった話 32

里芋に花の咲いた話 34

鰻釣りの話 34

第二部

日清戦争、日露戦争、韓国保護国化

日清戦争の起こるころ

渡辺洪基さんの心尽くしの話	35
学資工面の話	36
東海道を歩いて上った話	37
芝罘乗り込みの話	42
伊東祐享さんに茶漬けを振る舞う話	45
濟州島に渡った話	47
袁世凱の密貿易を封じた話	49
浪花艦の砲撃と英国輿論豹変の話	50

北清事変のあとさき

ドイツが膠州湾をとった話	54
矢野さんの電信落第の話	56
伊藤公北京来訪の話	58
快男児梁啓超を救う話	59
深夜に李鴻章を説き落とす話	64
二億両の懐合いを探る話	67
ドイツの野望を叩き潰した話	68
朝鮮公使にいく話	72

日露の危機孕む

- 鎮海湾の秘密地図の話 74
- ロシア艦隊鎮海湾に現れる話 76
- 鎮海湾を買い占めさせた話 77
- 買い占めを内閣が心配した話 80
- 山本権兵衛さんと虚実の対談の話 82

朝鮮の文化を拓く

- 関税収入を露仏両国が狙う話 85
- 貨幣制度を肇める話 86
- 朝鮮海岸に灯台を新設する話 89
- 第一銀行に紙幣を発行させた話 90
- 陸軍銀票強行を排撃した話 92
- 朝鮮人蓼を専売にした話 94
- 大隈さんを被る利権亡者をあしらう話 95
- 京釜鉄道が「岳神驚奔」させる話 97

日露戦争の火蓋を切る

- 韓半島縦断軍用路の話 100
- 日本軍京城伏兵案の話 102
- 居留民自衛団の妄動を戒めた話 103

戦機至ると東京に懲瀆する話	106
京城電信局を三日間封鎖した話	107
開戦の前夜ドイツ公使を驚倒させた話	108
敵艦撃沈の轟渦に王様の言質を取る話	110
千代田艦夜陰仁川を抜け出る話	111
敵の負傷兵を救ってやる話	113

対韓国策二千年の懸案成る

李王の移り気な外交工作の話	114
ロシアが魔手を自縛した話	116
ロシアの日本懐柔策を見破る話	117
ロシアの提案を排撃する話	119
葉山会合「保護国」決定の話	121
小村・ルーズベルト内談の話	123
御前会議特使人選の話	124
保護条約予備会商の話	126
京城宮本会議の話	128
李学相邸焼き打ちの話	130
間島紛争の因縁話	131
間島解決引延策の話	132
統監府成るの話	134
朝鮮財政の主ブラウンを送る話	136

後日譚ブラウン臨終の話 140

日露戦争のごみ掃除

伊集院が勅任参事官に自薦する話 142

軍用鉄道代三百万円が半値になる話 144

営口駐屯軍百万円費い込みの尻拭いをする話 146

満鉄株半数危うく米人に押さえられる話 149

米国国務卿が全満洲鉄道を押さえんとする話 150

密輸船「竜丸事件」を裁く話 151

伊藤・桂・後藤の北京訪問を食い止めた話 154

第三部 世界大戦と新中国

橄欖の花を七度見る

歐洲大戦イタリアがドイツを袖にする話 158

「憎いオーストリアの金貨も金」という話 160

「蘇子瞻」で皇帝と渡り合う話 162

日本を知らぬ「日本びいき」は凄まじい話 163

一国の見識というものの話 164

王者の直情、后宮の細心は嬉しいという話 165

支那へ三度のご奉公

第四部

世界大戦戦後処理からワシントン体制へ

欧洲大戦の後始末に立ち会う

- 大隈政策の打倒を決心した話 169
- 田中義一君の淡白と段祺瑞苦衷の話 171
- 「銅銭」事件並びに蒙古王援護紛争の話 173
- 「鄭家屯事件」日本の無理を戒めた話 175
- 清朝復辟の密使差遣計画の話 178
- 復辟運動を本野君と二人で差し止めた話 180
- 復辟支持を田中君に断念させた話 183
- 張勳支那独裁官と押し成る話 184
- 段祺瑞に叛軍買収金八万ドルを貸す話 185
- 原敬さんの思い付きで旅順へいく話 187
- 二〇三高地忠魂の膏にむせぶ話 189
- 「害鳥退治」と鯨見物の話 190
- 連盟は「猿小屋」だと笑う話 194
- アスキス夫人がわたしの膝を叩く話 195
- 仏首相エリオが感謝して欣んだ話 196
- ポアンカレの機嫌に障った話 198
- トルコの治外法権撤去を示唆した話 200
- ジョセフ・チェンバレンは真の親日家である話 201
- ロード・グレーの簡素ぶりの話 202

摂政宮にカーゾン卿が感服した話 203

バーケンヘッドは果断な男と思つた話 204

ロイド・ジョージがフォッシュ元帥を追い出す話 206

ワシントン会議米国勝因の話 207

日本人は何だろふという話 209

永い外交生活をやめ宮様付になる話 211

風変わりな画家杉浦俊香の話 213

生前に墓を立ててくれた話 217

紫煙余談 世界の癌を打診する

支那を狙う曲者——第一 まずロシアを追ひ払う英国筋書の話 220

支那を狙う曲者——第二 次にドイツを叩き潰す英国筋書の話 221

支那を狙う曲者——三に日本と疑われている話 223

ロンドン会議を成功させる唯一の方法の話 226

林翁の自叙伝を綴る（岩井尊人） 228

本書に登場する人名抄 233

付録 日露戦役当時の追懷 237

極東動乱

出先外交経験秘話

葛藤するロシア、中国、韓国、日本

凡例

一、本書は林権助述『わが七十年を語る』（岩井尊人編著、一九三五年、第一書房刊行）の改題復刻である。付録として「国防日」記念講演 枢密顧問官 男爵 林権助氏講演 日露戦役当時の追懐（一九三六年、財団法人京都府国防協会刊行）を収めた。

一、章と節の数字は省き、部立てを設けた。部のタイトルは本書刊行所によるものである。

一、索引は本書刊行所が加えたものである。写真類は一部のものを除き掲載を省いた。

一、本書では新漢字、新仮名遣いで表記した。

一、聞き書きであることもあり、表記の漢字／仮名選択、送り仮名、句読点、てにをは、字義の通じ合う漢字同士における選択など、全体として統一的に整理した。

一、「〔 〕」は本書刊行所による注記である。

序に代える

岩井仁兄

わたしも、今年、一九三五年には七十六だ。思えば四半世紀を三つ重ねたことになる。日本もこの間に、偉く変わったものだ。

わたしは、明治の前半、ちょうど新日本建設期の準備工作が、ほぼ成らんという明治二十年「一八八七年」の、わたしの二十八の齢から、去る七十の時まで、まる四十か年、実に雑多な渉外事項を、手塩にかけて暮らしてきた。この時間は、相常に永いといえたい。しかし、ただ永いというだけで、うちに顧みて、格別のご奉公もできずにしまったのは、誠に申し訳もない。強がつていえば、出くわしたことの数が少くないだけに、時に当たって、かなり苦心したこともある。そんな話は、えて、聞き手にはさほど応えぬかもしれないが、これも致し方がない。

何といっても、非常な勢いで躍進中の明治日本の後半は、その間に、その朝に立つものの方針により、後より考えて、その時はやむを得なかったにせよ、やや無理押しをやりすぎなかったかという場合もあり、しかもかかる場合には、ややもすれば軍部と外交との歩武が揃わぬもので、わたしなど、出先の役を承っていたものには、実に国家百年のために、その当時の中央の方針を施すにつき、心苦しいことがないではなかった。その

間、わたしとしては、一身を賭しても、国の真の将来のために、善処することに努めた。その成否はともかくとして、わたしとしては、顧みて思い残すことはない。この眇たる老驢、何のこたえもないであらうけれど、息の根があらん限り、ただ常に「次にくるもの」の幸福のために、その勤めに営ませてもらうと念じているより他、何もない。

往時を懐うと、実に、色んな事柄が浮かんでくる。それとても、今よりすれば、たいていは下らぬことばかりだ。ただ凡てのものをおしなべていうと、凡そ事件というものは、千姿万様の貌を以て緩急色々の速度で、降りかかってくる。それを安穩に片付けるためには、不退転の魂というものが要するという一事だ。そして、かかる魂は、また、自分が正しく真の無欲の境涯に立たねば、絶対に求められぬものだ。さらに狙うところの結果は、当の話の相手方に対しても、やはり幸福を頒けるといふ衡平無私という点を目標においてこそ、はじめて庶幾できるものだ。

さて、日本の朝鮮工作について、英米はじめ列国の注目を惹いたことは、到底当時日本人の考え及ぶところの比ではなかった。例えば米人 Sands の著した *Undiplomatic Memories*, 1930 など、かなり突っ込んだことをいっているよ。

岩井君。君が熱心に聞いてくれるので、愉快に話ができたよ。一つわたしの癖として、自分が出くわした事柄を、その都度書きとどめておくようなことをしないために、君もまとめにくかったこととお察しする。そして、かなり忘れてしまったこともあり、たとい覚えていても、なかにはびったり客観的記録と符合しない箇所もあるかもしれぬ。幸いにこの秋の夜話が、正史の考証用でもなければ、かつまた何のためにという難しい目的のためにしたわけでもなく、ただ君が聞きたいというので、秋の夜長の茶話をしたにすぎないのだから、みな、大目に聞いておいてもらおうよ。

それで、話のうちに、君が書きとめては、他の人たちが読まれて、どうも都合が悪いとでも考えてくれることがあれば、どしどし省いてもらいたい。つまり、わたしがいったことは、そりゃ、わたしの気性として、あ

りのままの記憶だけれど、書きとってこれを一冊にまとめて発表するについては、その内容一切は、君の自由裁量に任せる。わかったね。今になって「林があんなことをいう」などと、苦情をいわれる種を蒔くことも、わたしには余計なことだし、また、それが万一、君の綴ってくれた話の内容につき、幾分でも「事実と了解している」ところと符合していない」などというような小言を聞くようなことあらば、実際そう信じている人には気の毒だし、第一、面倒くさいからね。

もちろん、君がわたしの夜話を綴ってくれて、それが一冊の本になり、幸いに同輩の老人たちの思い出をそそり、笑い話の種ともなるとか、働き盛りの人たちの仕事休みの埋め草に役立つか、ことによれば嬉しい若いものの気性を練る稽古の資けともなるとすれば、それこそ最稀の儲けものだよ。

君は、実際、聞き上手だよ。とうとう本にしてみました。さて、どんな本を、君の親友の長谷川君が作ってくれるか。何だか楽しみになってきたよ。

昭和十年「一九三五年」一月十四日

林 権助

第一部 就職以前

生い立ち

永宝屋の話

わたしは万延元年（皇紀二五二〇年、西暦一八六〇年）に会津の城下で生まれた。生まれた日は、井伊大老が暗殺された前夜だったそうであるから、三月二日が誕生日となっている。

父親の家は会津藩で三百五十石を食んでいたのだが、そのころ会津の何町に住んでおったか、よくはわからぬ。何でも、わたしの祖父が「家督」といって、つまり戸主だね、そして江戸の常詰めだったそうだ。名は権助といって槍術の達人で、なかなか元氣な老人だったよ。この江戸詰めの役は、藩規上、会津の舎宅は藩に返上する。それでその当時、林の家屋敷というものがなかったわけだ。

つまり、会津の家かみやう中のものの家というものは、今日でいう官舎と同じわけで、京師とか、江戸とかへ詰める役になると、家は返上し、家族は城下の外や、近郊で仮寓することになっていた。

いつのころからかは知らぬが、そのころはすでに、林家の家禄の全部を挙げて、城下の古い酒問屋の永宝屋というのに、やってしまうことになっていた。そして「その代わり会津に残してある家族の食い扶持を適宜与

えてくれ。その他に京都や江戸にいたりきたりする時に必要な金は送って寄こしてくれ」という約束であった。義理堅いもので、ずっとこの打ち合わせ通り、永宝屋はちゃんと守ってくれた。今なおこの一族だろう、同名の酒問屋として会津で繁栄している。

そのころ、当主の祖父以外の一族は、天寧寺町というところに寓居を構えていた。もっともそこがわたしの生家かどうか、そいつはよくはわからない。

日新館の話

その後慶応三年（一八六七）年、わたしが八歳の時であったと思う、会津の藩校である日新館という学校に入ることになった。

元来、その日新館の入学年齢は、九歳になっていたようだから、わたしは一般より一年早かったわけだが、あたかも幕末の大騒動の渦中で、京都辺りの形勢が切迫していたことなどが関係したのかもしれない。

日新館というのは、非常に規律の立った学校だった。毎日登校する時も、ちゃんと通学区域が決まっている。その区域は四つか五つに分かれていたが、同じ区域のものは揃っていったものだ。一番年の若い奴が先にいくんだ。それが時によると、他の方面からくる一隊と出くわすことがある。すると隊長は、若いものは突き当たれというんだ。いわば豆兵隊白兵戦だね。しかし校舎に入って教場に出ると、その区域の関係はなくなつて、一緒になつて勉強させられたものだ。

当時のこととて四書や五経をやった。その他にわたしは撃剣に入門したよ。撃剣の流儀は一刀流であったが、その流儀以外のものは一歩も道場に入らず、またその流儀の話をする 것도、できなかったものだ。

もちろん入門する時は誓いをして、血判をやらなければならなかった。その道場では、どういうことをやるかというと、木刀で稽古をするんだ。今日のような面などは付けない。

城 山

西郷帰国の話

それから一年ほど経つか経たぬころであつたろう。喧しかった征韓論がとうとう爆発して、西郷は辞職して国に帰ってしまった。西郷と一緒に桐野と篠原とが帰る。それらにつれて御親兵がみな旗をあげて帰るといふ大騒ぎであつた。その中でわずかに踏みとどまつたのは、川上操六や野津兄弟などの少数のものであつて、その他はたいいてい帰ってしまった。帰つた男の数を勘定しても、かなり大勢の薩摩の将校と知り合いになつていたわけだ。

明治七年〔一八七四年〕と思う。わたしが世話になつておつた児玉実文さんが、大阪の造兵司の長官に転じたので、やはり大阪へ連れられてゆき、約二年ばかり大阪で住んでいた。

それから明治九年〔一八七六年〕の末ころと思う。何かの私用のために児玉さんが薩摩に帰省することになった。それで帰る時に「お前も連れてゆこう」というので、わたしも一緒にいった。鹿児島に着いてから、だいぶん西郷を取り巻いての波紋が大きく、形勢はなほだ不穏になっているのが感ぜられた。

そうすると問もなく、東京方面から内証に帰ってきていた人々を、西郷党が引つ捕まえることが始まって、またたくうちに、たいがい引つ捕まってしまった。つまり、スパイというので挙げられてしまったのだ。また城外に政府の火薬庫があったが、それももちろん西郷勢の手に占領されてしまった。

鹿兒島騒動見物の話

西郷勢の中には、在京時代御親兵の将校として知っておったものも、大勢帰っていたので、かなり成りゆきに関心を持っていた。ある日冗談まじりに、ある将校と道で出くわしたとき「お前も出てみたらどうだ」とわたしにいいおった。もちろんわたしなどの関係することではないので、ただ笑ってわかれた。

それから間もなく西郷の運動に関係ない事情で、児玉さんは官を辞してしまった。実はその辞職願をわたしが代筆したのだ。

その時にわたしは感服したが、児玉さんがわたしに向かつていう。

「俺はお前も知つての通り、官を辞してしまった。官を持っておたら、ただ見ていることはできないが、もう俺は悠々自適だ。西郷党のことを思うと、友達もだいぶおるが、気の毒ながら、あの人たちは死ぬより他はない。戦いは敗けるんだ。薩摩の連中はたいいてい新制の徴兵等は、むしろ馬鹿にしているが、一旦統制のもとに各藩の武士が氣勢を揃えることになる、そうは蔑視できぬ。維新の際のころ、何だ雑藩の奴らと思っておった、そ奴が案外強くなっているぞ。だから薩摩の狭街に暮らして、甘く見くびっているは大間違いだ。それにこの際の挙兵は賊という汚名を被らねばならぬ。こんな馬鹿なことをしてはいけないんだ」

城下を避難する話

第二部

日清戦争、
日露戦争、
韓国保護国化

日清戦争の起こるころ

芝罘乗り込みの話

わたしが外務省に入ったのが明治二十年（一八八七年）七月だった。当時の外務省は、取調局、通商局、翻訳局などに分かれていた。そしてわたしは翻訳局及び通商局の兼務を命令せられた。

その十月の末だったと思う。翻訳局長の鳩山和夫さんがわたしを呼んで、

「お前外国にゆくか」という。

「外国にゆくこうと思うから外務省に入ったのです、いったいどこへゆくんです」

「芝罘^{チーフー}にゆけ」

わたしにはわけがわからない。とぼけて、

「いったい芝罘^{チーフー}ってどこです」

と重ねて訊いてみた。そしたら真に受けて、ちょっと鳩山さんは怒ったよ。

「そんなことを知らぬか」

仕方がないので、よい加減の返答をやっておいた。

「もちろん命令か何かならばゆくことを辞しません」

といったが、喜んでゆくとはいわなかった。

いずれにせよ芝罘にゆく以上は、名目は領事であろうし、さすれば通商局長の命令をきかざるをえん。その時の局長は浅田さんであった。その足で浅田局長のところについて、

「鳩山さんがこういうことをいわれましたが、わたしはまだ自信がありませんぬ」

といってやった。実際外務省に三か月ばかりしかいないから領事事務などに一向慣れていない。

そうすると浅田さんは、すぐさま大臣のところについて、「林はまだ危ない」と注進したようだ。

そこで鳩山さんがまたわたしを呼んで、

「君に異論が出てきた。異論のためにゆくことができぬということになると、ちょっと外聞が悪いじゃないか。これから大学出のものは駄目だということになる。君がゆくとは決心するならば、今ならすぐ決定する。俺が大臣のところへいってすぐ決めてきてやろう」

という。わたしも他から危ないなどいわれることは、ちょっと小癪に障ったから、

「それならゆきましよう」

といい切った。その前後の様子がいかに慌ただしいので変だとは思ったが、もちろんどんな用向きだかさっぱり知らなかった。

それが決まると、またすぐ通商局長に呼ばれた。

「至急に発ってもらいたい。第一の便船で発ってもらいたい」

といわれる。それでは中二日ぐらいの余裕しかない。

「なぜそんなに急ぐのでしょうか」

「出先の日本領事が、何か密貿易のようなことをやった形跡がある。それが支那の官権にわかつているような様子である。一刻も早く呼び返さざるをえん。それで前任者が帰朝を命ぜられるというのを知る前にお前が着かぬと困る。それからその問題の実情をお前が調べて報告せよというのが命令である」

「わかりました」と、急ぎ出発の用意に取りかかった。用意といっても、第一に困ったことに衣裳が整っていない。

その時に大山という秘書官がおられた。この人が「一着余分があるから燕尾服をくれる」という。「これはないがとう」とそれをもらっていった。わたしはただ一組のジャケツしか持っていないかった。学校を卒たホヤホヤだろう。

横浜まで見送ってくれた仲間が随分おった。船が出る前「留別会だ、午餐をみなに振る舞え」という。「よし」と快諾した。すぐ宿屋にいい付けて「うんとご馳走するんだ」というわけだ。

やがて宴会がたけなわという時に、やや改まって、物識りらしい仲間に訊ねてみたよ。

「支那でも日本の金を使うんだらう」

「そりゃ使えない。今急いで替えていかなければいかん」

と勢い込んでいってくる。

「そんなら貴様替えてきてくれんか」

といいながら、持っていた金を一銭残らずほうり出して頼んでしまった。

やがて出帆となった。

「儂は日本の銭が一銭もなくなった。宿屋の払いも昼食代もできなくなった」

「全く、そうだったね」ということになって、送りにきた一同がそれぞれポケットから金を出しあって、その支払いを全部済ませてくれたよ。留別会が、それで、送別会になってしまった。

横浜から上海までは英国船だった。それからこの国の船だったか、ともかくも乗り換えて芝罘に着いた。

伊東祐享さんに茶漬けを振る舞う話

当時の芝罘は日本人の宿屋など、浜辺に水夫の安宿が二、三あったばかりだ。とりあえず、わたしは外人経営のホテルに宿を取った。風呂に入ろうと思ってボーイを呼び「湯を沸かせ」というと、小便をやりながら湯を沸かしている。「小便をするところがあるかね」と訊くと、近くに箱がある、それを指差している。その覆いを開けてみると、船の中にあったのと同じものがあった。「ハハアあれにやってよかったんだな」と思った。横浜から上海、上海から芝罘とかなりの日数の間全く識らずにいたんだ、便所をね。たいてい当時の洋式生活に対する理解はこんなものだ。かくして明治二十年（一八八七年）十月に芝罘領事として乗り込んだ。

芝罘に着いて二、三日で前任者の行動は調べてしまった。その処分も済んだけれども、あとは何をしてよいかわからないんだ。山東方面、北京方面からの情勢がどんなだか一向見当がつかない。しょうがないので考えた。税関の役人どものうちちょっとした英国人が三、四人おったので、そこへ乗り込んでいって、訊いてみた。

「俺は当地のことが何もわからないんだが、どこか倶楽部みたいなものはないかね」

「税関の外人仲間でメスルームというのがある。お前は独身者だろう。時々遊びにきてもよい」という。それから時々そこへ夕食にいった。

そんなことでだいぶその地の様子を覚えてきたが、まだ十分はつきりわからなかった時分に、日本の艦隊が投錨したことがあった。

伊東祐享さんが司令長官だった。税関長の英人夫妻が伊東長官を午餐に招待するということになった。お相伴として招かれた芝罘にいる主だった外国人は、みな楽しみにして待っている。

わたしは長官を出迎えかたがた挨拶に艦へいった。そしてその際税関長夫人の強^たつての所望として軍楽隊を

北清事変のあとさき

ドイツが膠州灣をとつた話

それからすぐ外務省へ出頭すると、次官をやっていた小村さんが、ろくろくわたしの挨拶も受けぬうちにいう。

「君の帰ってくるのを待っていたのだ。実は君に北京の首席書記官にすぐにももらいたいんだ」

「でも、私は家の者が病氣だというんで帰していただいたんだからね」

もつとも小村さんとは特に親しい間柄であつたので、そう答えた。すると小村さんは「それで君の希望は」という。「いやです」と答えると、「そんな勝手は止してくれぬか」といわれる。それで考え直して「ゆきます」と明言した。

実は支那にゆく人は内定しておつたが、「その男では危ないから替える」というわけであつた。その翌日、時の大臣、西徳二郎さんにあつた。そしてすぐに、こう訊ねた。

「北京にゆけというご命令ですが、ドイツが膠州灣を握つたということについてどうなさるんです」

西さんはただ黙っている。それで重ねて、こうわたしから口を切った。

「昨日海軍省に知っている男がいるからいつてみました。

『今度の膠州湾占有について、いったい日本はどうするつもりか』と訊きましたところ、

『もちろん政府の命令通りだとしか答えられない』

『それはいわずもわかつている。そんな返事を訊くのではない。ドイツの行動に対して、右とか左とかいったようなことをするには海軍の力がなければいかん。海軍には海軍として独自の考えがあるだろう。それを訊きたいのだ』

といいますと、その男は声を落として、

『実はデモンストレーションをやりたいのだが、現在の海軍力ではどうも、それをやっても却って支那に見くびられるだけのことだ』と情けない顔をしていました」

すると西さんも情けない顔をしてはじめていわれた。

「遺憾ながら今手も足も出ない。日本の武力として、今日進んでどうすることもできないんだよ」

それでわたしは小村さんのところにいった。

「大臣はこういつておったよ。こんな状態の下にわたしが北京へゆくのはいったい何の用です。困るじゃありませんか」

「実は北京からくる電報はちつとも当てにならぬ。ドイツの態度に対して日本が何をするにも、せぬにも、いったい北京で列国が今どういうことをやっているかということなど、信頼できるだけにわかるような電報が一本もこないんだ」

「それが当てにならないでは困るね」

「ところがそれが遺憾ながらわからない。始終変わった電報がくるんだ。いったらそいつを注意してくれんか」

日露の危機孕む

鎮海湾の秘密地図の話

朝鮮の公使にわたしが確定したというので、方々から送別会をしようという案内の内に、一つ奮ったのがあった。

それは陸軍の中堅どころ三人の連名で、「送別したいから是非きてくれ」と書いてある。その三人は、田村怡与造という大佐と、それに福島安正、長岡外史とである。後の二人はまだ中佐だったようにも思う。

わたしは顔触れが面白いとは思ったが、格別気にとめず普通の送別のつもりで無論受けておいた。そうしていったんだよ。いくと三人以外には誰もきていない。少し待っても相客らしいものは誰も顔を出さない。食事が出て、誰もこない。ちょっと味なことをやると考えたので、

「君等はわたしを送別するというが、人数はこれだけかい」
と訊くと、

「そうです」

という。

三人の中で最もしっかり口を利くのは田村であった。

「今日はあなたに折り入って頼みたいことがあって、誰も呼びません、そう思ってた下さい」

と冒頭して、田村がいうことを聞くとだね、ロシアとの関係において、どうかしてロシアが朝鮮沿岸でこの辺の地点のどこかを占領するとか、その辺に根拠地を設けるというようなことが万一あったら、日本の将来はどうしても安心ができないことになる。ついては特に目当てがあるというわけではないけれども、色々考えてここに一枚の朝鮮地図を作ってきたと、こういつて畳の上に拡げるんだ。それは随分大きなものであった。無論彼らがひそかに書いた手製図であることは一目瞭然であるが、詳しく小さい地名までも書いてある親切な図面であった。

田村はさらに地図について説明する。

「こういう地図を書いてみると、」

といって、ちょうど現在の鎮海湾根拠地の地点に当たる場所を急所として特示して、

「この辺の地点をロシアに押さえられたら、将来の日本は駄目と見ねばならん。あなたが公使になってゆかれるんだから、われわれがあなたへのお願ひとして特に気を付けていただきたいのはこのことです。それでご足労を煩わしました」

わたしは感服した。それでその地図をもらってゆくことにし、

「宜しい。何か起こったら引き受ける」

と約束した。

元来そういう問題については、外務大臣とか陸軍大臣とか参謀総長とかいう方面から、本式ならこななければならぬところだが、そうじゃない、これは全然この仲間の発意であつたらしい。とにかく非常に熱心な頼みだ。そして、なかなか妙^おな申し入れである、実に気に入ったので快諾したわけだ。

朝鮮の文化を拓く

関税収入を露仏両国が狙う話

日露戦争が起る二、三年前より朝鮮の関税収入が年々余ってくるんだ。溜まってそれが増えてくるんだ。それを朝鮮の王様は欲しくてしょうがない。

もう一つは、ロシア側及びこれにくっついてるフランス側が、しめしあわせてこの関税剰余金を何とか自分の方に取りたいと虎視眈々という有様である。王様はこの収入を抵当にして金を借りようとしている。フランスは金を貸し付けたい。ロシアは金がないが、王様に色々取り入っているの、そのフランスの金を以て、王様に恩を着せたくてしょうがない。この剰余金を種にして借りたい、貸したい、借り出しの世話をしたいというわけだから、危ないこと夥しい。

フランスとロシアとはだいたいぶ打ち合わせが進んでいる。その様子が手に取るようにわかってきた。

これは厄介だ。この金を彼らに取られた日には、後が厄介だ。それでわたしは当時総税務司をしておったイギリス人のブラウンという人に、わたしの片棒を担がせようと考えた。それである日わたしはブラウンにいっ

た。

「この剰余金を目当てにロシア側、フランス側が色々な計画を立てているが、君は知っているんだろう。これを食い止める方法は君にあるかい」

と訊いたら、ブラウンがいうには、

「それは自分も同感だ。何とかして食い止めなければならぬ」

はじめ、日清戦争の後間もない時、日本が韓国政府に三百万円の貸し付けをしたことがあり、それにそのことで伊藤さんの聳の末松という人が、どこかの次官だったかと思うが、日本を代表して朝鮮にきて、その仕事を済ませた。どういう目的でこの借款ができたのかは、わたしはよく覚えていない。

わたしのいったころには、毎年毎年返済しておって、それがもう二十五万円ばかりまでに減っていた。ブラウンがいう。

「あの二十五万円は当分返さなくても、日本はよいだろう」

「よいどころじゃない。その金を皆済するまでに、この剰余金を抵^{かた}当にするとという理由を先方が承知し、それを他に手を付けさせずにおけるものなら、それは無論よい。しかし関税剰余金はウンと余っているんだから——何でもその時、すでに二百万ドル以上残っておったろう——それで日本よりの借金残などすぐこの残金の金で返してしまうというかもしれないぜ。その時は君はどうするんだ」

「さあ、そいつは厄介だな」

と、ブラウンははたと困ってしまった。

貨幣制度を肇める話

「わたしには別に考えがあるが、どうだ、朝鮮にはまだ貨幣制度が何^{なん}にも立っていないじゃないか、この関

日露戦争の火蓋を切る

韓半島縦断軍用路の話

時局が恐ろしく切迫して、ロシアとの関係がよほど際どくなってきたころに、陸軍から二人の人がきたことがある。井口という大佐と、松川という大佐だった。後に二人とも大將になったはずだ。その人たちがわたしにいう。

「いよいよ日露の関係が破れるという場合には、どうしても陸兵を釜山、馬山浦、京城と行軍させねばならない。その道を作ってくれませんか」

迂闊な話だし、無理な考えだとすぐ考えたが、その熱性にほだされて、

「もう少し詳しく聞こう」

と訊ねてみた。すると、その説明はこうだ。

「戦争が始まった時に、この道筋に依らねば陸兵を持つてくるのが困難だというわけです」
そこでわたしは、その実現の困難という方を先に説明しようと口を切った。

「わたしは軍人じゃないから軍の方針はともかくとして、その路ができたらこの上もない話だが、わたしには、果たしてそんな道を朝鮮の政府が作ってくれるかということはなはだ疑問だ」

どんなことをしても、この道がなければ軍ができない。矢でも鉄砲でもと熱心に主張する。武士の魂魄というものの面目はかくあらねばならぬ。

「京城に陸路より兵隊を持ってくるより他に、安全な方法がないのです」

しかし、朝鮮政府がどういう立場にいるかということを考えに入れぬ軍略というものが、果たして成り立つかについてはむしろ気の毒であったが、あまり一途に思いつめていたので、肩すかしのつもりでわたしはいった。

「それは難儀なことを君たちは考えている。とりあえず、わたしがその表面に立つ前に、公使館には駐在武官^{アタッシェ}がいるから、その手で先ず朝鮮政府の当路者や宮中方面の人々の意向を、よく探ってみることが先決問題だ。駐在武官は各方面の人々をよく知っている。それにやらしてみよう」

そうは手配したものの、実際その計画の迂遠なものには驚いた。しかし、あまり気の毒なので、朝鮮王廷や政府の事情を参考までに説明しておいた。

「第一、道を作るには金が必要だ。その金を日本から出そうという考えも判然していないようだし、たとい日本が敷設するとしても、どうしても朝鮮の王様の同意を得ざるをえん。ところが王様は日本に付こうか露国に頼ろうかと、ぐらぐらまごついているんだ。今ロシアに気兼ねをしながら、宜しいやれというようなことは断じていい切りなさるまい。結局できぬということになる。しかし君たちの心の済むまで、やるだけはやってみたまえ」

二人は無論その実現にほとんど骨を折ったが、やはりできない相談であった。そうしているうちに、段々時局が切迫してきたので、二人は帰ってしまった。

対韓国策二千年の懸案成る

李王の移り気な外交工作の話

朝鮮の政治事情は、日清戦争が済んで三国干渉となり、日本が手も足も出なかった時代が、かなり日本にとって厄介な問題であった。

日本からすれば日本の東洋における根本政策の眼目として、朝鮮の政治を革めておかねばならぬということは、一貫したる方策であった。溯って井上馨侯がまだ伯爵のころだと思ふ、朝鮮の公使になってゆかれた。そして、いぶん朝鮮の宮中府中対策について苦心をされたものだが、前申す通り何分にもこの三国干渉の後を受けて、朝鮮官民とも日本を軽視していることとて、日本のことなどは唾もひっかけないという状況であったので、あれだけの偉い人であったが、井上さんとてもこれという仕事は何もできなかったらしい。

朝鮮側からいうと、いつの時代でも改革なんていうことは嫌でしようがない。他の干渉を受けるということが、ことの善悪に拘わらず第一好かないのである。

その井上さんも多分匙を投げてしまわれたのであろう。やがて帰ってこられて、その後に公使になっていっ

た小村君にしても、原敬さんにしても、朝鮮がそういう事情の時であったから、何ら自分の思うことを行うこともできずに済んでしまった。原さんとしては、韓国公使が役人生活のお終いであつたらう。その後新聞界に入つて、やがて政治方面に転向してしまった。その原さんのすぐ後であつたか、加藤増雄という人が公使として朝鮮にゆき、その後に遂にわたしがいった。

赴任当時の状況は、この前に話した通り、やはり、いや、ますます日本の勢力がほとんどなくなったといわねばならん時期に陥つていた。

ところがここに不思議なことがある。

この加藤さんの公使時代より、さらにずっと前から、わたしはいつかからは判然^{はつきり}覚えないが、日本の勢力というものはないうちにも、細々ながら伝統的に引き続いて朝鮮政府の閣員の中には、相互の勢力抗争上、いわば日本党と目せられる人も入っているという一事である。

もちろん井上さんや歴代の公使は、それぞれ所存のほどを実行しようと企てていたに相違ないから、その日本党の大臣たちも機あるごとに策動したのであらう。

それらの事情がまたよく王様の側にわかつていて、つまり黒^{ブラックリスト}表みたいな具合にだね、そして、かかる勢力を王様としては除きたくてしょうがない。しかも王様の気質として、そう思えば矢も盾もたまらなくなる癖であつた。

北方、ロシアはかかる事情の下にある朝鮮を放置しておくはずはない。時あたかも三国干渉、日本はぺちゃんこという機に乗じて色々な計画を企てていた。王様としては、うまいことづくめのロシアの提言に、一杯も二杯も三杯も食わされたこと疑いもない次第であつて、また食う時はうまいんだからしようがない。

加藤公使時代かその以前かと思う、王様とロシア公使との間に談じ合いができて、王様がこっそりロシアの公使館に引越されてしまった。そしてそこで起居せられることになった。すると果たして觀面にロシアの魔手が朝鮮政府にも宮内府にも露骨に入ってきた。さらに陸軍にも入る。財政方面にも入った。ありとあらゆる

日露戦争のごみ掃除

伊集院が勅任参事官に自薦する話

朝鮮公使を退いて、わたしは二月に帰朝して、それから支那公使に赴任することになったのは明治三十九年〔一九〇六年〕の六月ごろだった。これで支那には二度のつとめをするわけだ。

ちょうどその時に在英大使館に勅任参事官を置くということが決まった。それでわたしはすぐ大臣に会って注文した。

「この度勅任参事官を置くようになったわけですが、それには山座をやってくれませぬか」

「それは実は私の後任にするつもりです」

そのわたしの考えを聞いて大臣は、

「ウン、宜しい」

といって承知してくれた。山座はその時政務局長をやっておった。

ところが伊集院はそのころどこからか帰ってきて、東京におった。そして、この話を聞いて大いに食指動き、

「わたしがゆきたいな」という。

山座の今の仕事はかなり複雑だから、その後の人繰りを考えていた際に、伊集院が、つまり飛び込んできたわけだ。

「今それについて話をしているところだ」とわたしがいようと、

「それなら是非わたしをやって下さい」

それで山座は、自分は後にすることにして、伊集院が先にいってもらおうということになり、とうとう伊集院が勅任参事官になってゆくことになった。

わたしは北京で公使を二年ばかりつとめたが、間島問題やら何やら下らぬことばかりで、これ以上北京にいるのが嫌になった。

日本からは、その度ごとに、

「そう帰るといわれては困る」

といってきたが、どうも嫌でたまらなくなったので、無理無体に、

「帰る」

といって東京に帰ってきた。そしてわたしの後任としては、その時他へ回っていた伊集院を充てることにして、「伊集院を呼び返して下さい」

といって筋書き通り伊集院を推薦した。

政府の方ではその通りにして、伊集院をわたしの後任に坐らせてくれた。

わたしは北京を発ってから、どこにゆくか、そんなことは目当てなしだ。北京を発って、天津に着くと東京電報を受け取った。

第三部

世界大戦と新中国

橄欖の花を七度見る

歐洲大戰イタリアがドイツを袖にする話

それで前に述べたように、イタリアにゆくことになったので、そのつもりで東京に帰り、間もなくイタリア大使として赴任した。ローマに七年おったよ。その間に一度、八、九か月賜暇をもらって帰ったが、ともかくも永いイタリア生活だった。

イタリアというところは、日本との外交関係上、格別の用もないところで、すこぶる暢気であった。暇があればイギリス辺りに遊びにゆくとか、イタリア中の色々なところを見物して歩くとかして暮らし、別に仕事もなくて済んでしまった。

わたしのイタリア生活の終わりに、こういうことがあったよ。世界戦争が始まらんとする時だ。もちろんその時は、まだ日本は対独戦争に加担していない時のことだ。

わたしにドイツ大使に転任せよという命令がきた。ドイツをこの際見ておくのもよいし、今後日本もどうするかもしれぬと考えて、早速ベルリンゆきの用意に取りかかり、荷造りなどをして引っ越し準備を始めたが、

どうしたものか後任者に対するイタリア皇帝の同意がまだきていないらしい。それでそれを催促をしにローマ政府の外務省にいった。それは一九一四年八月四日の午前のことだ。

そのころは歐洲一帯が、今にも兵火が飛ぶという時であった。日本も色々考えておったろうが、どうせ乗りかけた船だ、しょうがない。日本も加わることになるに決まっている。その場合には、ドイツに対し最後通牒を突き付けるのが、わたしの役目だろうと思いつながら、ローマの外務省を訪ねたわけだ。

ところが外務省の扉口に臨むと、自分よりも一足先に入ってゆく奴がある。ふと見ると、その後ろ姿はまさしくドイツの大使ということに気が付いた。入口の近くに大きな控室があったが、そこにドイツ大使が入った。それでわたしもそこへ、のこのこ後から入っていった。そして奴さんの側にいつて坐ると、奴さんがいう。

「今日はわたしは所用を持っているから、お先に失礼させて下さい」

先に案内を乞うたものが先に用事を済ませるのは、後からきたものの文句はいわれぬことだ。「さあどうぞ」といつてやったが、間もなくドイツ大使がイタリア外相に面会すべくその控室を出ていった。やがて済んでまた控室に戻ってくるのを待ちかねて、その戻ってくるのとゆき違いくらいに、急いでわたしは隣室の大臣室へ入っていった。そして挨拶を抜きにして、いきなりわたしは訊いてやった。

「今あの男は何を喋りにきたのですか」

そしたら外相は気軽にこういうことをわたしにいった。

「三国同盟の一員として、イタリアはドイツの方に加担してくれるか」

つまりドイツ側に入れとイタリア政府にいつてきたわけだ。それで、わたしは曇みかけて訊いた。

「それであなたは何といつて答えましたか」

外相は半ば独り言のようにいつた。

「入るわけにゆくもんか。それでよい加減の返答をしておいたよ」

これでイタリアの腹がわかったよ。

支那へ三度のご奉公

大隈政策の打倒を決心した話

わたしがまだローマにいる時に、「是非もう一度支那にいつてくれぬか」という大隈さんの、強^たつての頼みによって、またぞろ支那にゆくことになったのは、ちょっと前に申した通りだ。

その赴任当時の状況をかいつまんでいえばこうだ。

当時日本が、支那に対してどういうことをやっているかということは、日本に帰る以前、すなわちローマにいる時分より、色々の情報で薄々は承知しておったわけだ。それに基づいて考えると、わたしの心境に、どうも疑問として映ってくるのは、大隈さんがやっておった対支政策である。しかも大隈さんは自身のその政策について、わたしが同意しているもの、少なくとも同意するものと考えて、それでもう一度わたしに支那へゆけと、いわれたのではないかと想像せられる廉がある。

しかしながらわたしはこれを知らん顔して、むしろ鵜呑みにして、

「宜しゅうございます。承知しました」

といって三度目の支那ゆきを引き受けたのは、実は、もし大隈さんの対支政策が自分の想像している如くとなれば、それは日本の将来を見通して考えると、はなはだ不都合であると信ぜざるをえぬから、その政策を逐一叩き潰さねばならん。その目的を腹に納めて、これを引き受けたわけであった。

いったいその時の大隈さんの企てられている対支政策をみると、一途に袁世凱のやり口が憎いというためであつたかも知れないが、そのやり口がいかに無節操のようだ。袁氏一派に反抗している南方の革命派を煽てあげて、それに間接に援助を与える。そして北京政府に対しておきながら、同時に北の方では宗社党といわれる一派——つまり満朝を回復しようという党派にもまた、蔭になって色々援助を与えて、北京政府を困らせるような行動を頻りにさせるといふ有様で、それがますます露骨になっている時であつた。

この大隈さんの取つた天秤棒のようなやり口、節操のない両道を追うようなやり方は独り宜しくないのみならず、列国に知れる場合において日本が引き込みのつかぬ立場に自分を追い込む結果となることは必定であり、その時極めてまずい立場になつて、そのために日本の対支政策がここ三十年ももっと厄いせられはしないか、実に厄介なことになつたわいと、実にわたしは心痛に堪えなかつた。

また、万一、その大隈さんの両翼を使喚して中央を押し潰すということが、直ちに成就するとしても、後をいったいどういう風に形作るのか。これについては何等の定見も予測も立っていない。

北京に仮に革命騒動が燃え上がったとして、革命党と宗社党とが一緒に、しかも元々両者の間お互いには何の連絡もないし、相許すべき何物もない、正に火と水との正面衝突となる。この相容れない二つのものが各自自分の力で革命を敢行したという矜恃を持つ、その場合、いったいどう日本が裁くつもりか、かかる矛盾したことが、どう考えてみても物の成る筋合いのものではない。

やがて英国を發つてシベリア鉄道に厄介になつて、ちょうどハルピンに着いた時、袁世凱が死んだという電報を見た。袁氏には氣の毒なことであつたが、まあそれで大隈さんの一つの的が落ちたわけだ。これを機会に

第四部

世界大戦戦後処理からワシントン体制へ

歐洲大戰の後始末に立ち会う

連盟は「猿小屋」だと笑う話

ロンドン大使として、日本のためにといえ、天下泰平の時にめぐり合わせたためか、仕事らしい仕事に一度もあわず、それでも何やかにやしているうちに、ちょうど六年いた勘定になる。

ロンドンでの思い出を話してみようか。

取り上げていうほどのことでもないかもしれないが、こんなことがあった。

ロンドン大使として日本を出発したのは一九二〇年の末だったと覚えている。イギリスに着くと間もなく、国際連盟へ出席せよというので、スイスのジュネーヴにいつてしまった。それでロンドンのいわゆる社交界については、少しも知る隙ひまもなく、旅に出た次第であった。

会議が済んで、ロンドンに帰ってきたころ、アメリカのある大新聞の記者が大使館にわたしを訪ねてきたことがある。

その当時は英仏はじめ列国が、アメリカをどうかして連盟に引き入れたいという希望を持っていたころであ

った。

その新聞記者がそれをかなり気にしていたらしい。それでわたしに訊ねた。

「そのことについて閣下はどうお思いですか」

その男を見受けるところ、なかなか考えのすわった心地のいい奴であったので、わたしはつい冗談をいってしまった。

「君、そんな冗談をいってはいけない。わたしは今スイスから帰ったばかりのところだ。連盟の今日までの空気など、わたしはちっとも知りやしない。わけもわからず首を突っ込んでみただけのことだが、ちっと驚いたね。国際連盟は、まるで猿小屋^{モンキーハウス}だね。そこへ以ていって、アメリカが入ってくるということになると、猿小屋^{モンキーハウス}に野良猫^{ワイルドキャット}をご招待するようになるものだ」

そういつて微笑してやった。そしたらその記者も悟ったような様子で笑って帰っていったよ。

その後、何かわたしの批評にこと寄せて、連盟を冷笑するような記事でも、その記者が書くかもしれない、書いたとてそれまでのことと思っていたが、さすがに世間を広く見ている男と見えて、何もそんなことに触れていなかったよ。日本の記者にも、こういう線の太いものが相当欲しいものだね。

アスキス夫人がわたしの膝を叩く話

ロンドンに帰った当座であったか、アメリカの駐英大使が帰るということであった。それでそのお別れの午餐に呼ばれた。その大使というのはデヴィスだったよ。わたしはまだロンドンのソサイティに出ていない時のことであつた。

その集まりには色々な人がきておつた。自由党のアスキスもきておつた。前いった通り、わたしには、この集まりは本式のロンドン社交界のはじめての顔出しだったので、参会者の顔の大多数はまだよく知らない。や

紫煙余談 世界の癌を打診する

支那を狙う曲者——第一 　　まずロシアを追い払う英国筋書の話

日清戦争（一八九四・五年）までは「支那は東方の怪物」というままで、何だか膨大な国土と、永い複雑な文化と、歐洲全土にもあたる大勢の人間を抱えている不思議な存在として映っていたても、現実の歐洲人の生活には、ただ「遠方の話」で、まるで「お伽の国」のようにしか考えておらなかったらしい。無論中には達眼の政治家や企画者もおっただろうが、そのころ西欧は第一、普仏戦争の後で、その主力国はそれぞれ脚許の整理に忙しかったこと、英国はその間にインドやその他、事情の不明な極東に比べては比較的によく調査できている他の地方の工作を急ぐ必要もあったりするので、支那方面についてはただ南部に香港という足溜まりを作っておくというくらいにとどまっていた。その当時のアメリカは、米大陸内の事情に手一杯で、また、まだ幼くて世界の檣舞台には首を突っ込む位置を占めていなかったとみてよい。

ところが日清戦争の結果を見たロシアは、前世紀来の東方侵略政策に、さらに拍車をかけることを考えた。ロシアは要するに、支那を与しやすしと見たわけである。

何といっても、地続きは強い。殊に世間からは、ややもすれば忘れられがちのアルタイ山脈の、山蔭での一人仕事である。興安嶺などという名は、お伽話に出る山かというくらいの関心しか、一般欧米人は持たなかった間に、瞬くうちに、支那はロシアの侵蝕にその北辺を侵され、いよいよ支那本土の鬼門にあたる、今日の満洲帝国の版図を、根こそぎロシアにやられてしまったとみてよい。

この野望に片棒を担いでおいて、自分は北支那を一挙に物にしようと企てたのは、ドイツのカイゼルであった。北京政府のうちに炯眼の士なしとせず、ドイツやロシアの魔手にたぶらかされていては、支那は滅んでしまふということを気づいた人々は、この際、日本や英国に頼つて、せめてロシアやドイツを掣肘したいと考えるのも、当時としては無理ない話である。梁啓超などもその一人である。

一九〇〇年の北清事変は、形は、小さい北京宮廷内の抗争に過ぎなかったとはいえるも、その騒動が列国共同出兵ということに導いたために、列強がそれぞれ支那に対する関心を、著しく喚び起こすことになり、ここで明らかに北京政府が老耄おいぼれてゆく全貌を見透かされることになってしまった。

当時頂上の国勢であり、世界の盟主として自任していた英国としては、ロシア風情に支那を勝手にされてたまるものかというわけで、まずこの圧力を除こうと考えてきた。はじめの日英同盟はそのつもりでできたわけだ。少なくとも英国側から見たる日英同盟を結んだ本心はそうなのだ。

英国の方針は図に中あたった。日本を手先に使つて、うまく、ともかくもロシアの南下に一痛撃を食らわすことができた。

支那を狙う曲者——第二次にドイツを叩き潰す英国筋書の話

しかるにこのロシアに代わつて、いよいよカイゼルが首を出してきた。ドイツは欧州でも色々なことを企んで、ややもすれば勝手な真似をする。英国がそれに引っ掛かっている間に、ドイツは支那に食い付きにかかつ

付録 日露戦役当時の追懷

本講演は本年三月九日京都市朝日会館における本会主宰「国防日」記念講演会の速記にして講師の校閲を経たるものなり

昭和十一年（一九三六年）六月

財団法人 京都府国防協会

開会の挨拶

開会に当たりご挨拶を申し上げます。

京都府国防協会長 京都府知事 鈴木信太郎

わが国防協会は、恒例に依り陸軍記念日を卜し「国防日」を設けまして、国民精神の作興並びに国防知識の普及を図るために種々の事業を計画実施しつつあるのでありますが、ご承知の如く日露戦役はわが国力を賭して遂に空前の大勝を博したる大戦役でありまして、わが国はこの時を一転機として爾来駸々として国運の発展を遂げ、世界列強の班に列するに至ったのであります。その克くかかる大勝を博するにつきましては挙国一致、

上下慘憺たる苦辛をいたしたのであります。翻って現下内外の情勢を見ますれば、誠に多事多難の非常時に際会しておりまして、これを克服せんがためには挙国一体となりて当たらねばならぬと思うのであります。依つてこの際、往時を追懷して時局に善処するの途を求むべく、ここに枢密顧問官林男爵閣下のご講演をお願い申し上げましたところ、閣下には本協会の切なる希望をお容れ下さいまして、目下余寒去りがたき折から、かつは枢要のご職務上お出向きご困難の御身と拝察しておりましたが、枉^まげてわざわざご来洛を仰ぎまして諸君と共にご高見を伺い得ますことは、誠に望外の仕合わせと存じ、厚く感謝の意を表する次第であります。閣下には永く在外使臣の重責に任ぜられ、日露戦役当時には直接重要な折衝に尽くされたことを承っております。その後、関東長官、式部長官等ご歴任の上、現に枢密院に重きをなしておらるのであります。特に大正十四年（一九二五年）、秩父宮殿下ご渡英に際してはその随員としてもっぱらご補導の大任に当たられたとの御事であります。

ここに諸君と共に閣下のご高見を拝聴して、非常時局に善処すべき覚悟を新たにしたいと希うところであります。何卒ご清聴の上、本講演会開催の趣旨に副われんことを希望いたします。

日露戦役当時の追懷

樞密顧問官 男爵 林 権助

わたしはこの国防協会、未だ創立以来そう長くもお経ちにならぬようでありますが、その主催講演会において、今から三十一年前の日露戦役をいささか追懷いたしまして、皆様の前で、ちょっとその当時の感想を申し上げます。

わたしが朝鮮の公使を命ぜられましたのは、明治三十二年（一八九九年）でありまして、その当時朝鮮における日本の地歩と申しますものは、いかにも衰えておった時期でございました。ご承知の如く、日清戦役後いわゆる三国干渉というものがありまして、それ以来朝鮮における日本の地歩は、ずいぶん有名な方々が、朝鮮に公使としていかれたのであります。が、いかんともし難い。三国干渉の余勢を受けて、朝鮮における日本の地歩というものは、誠に残念な地位にあつた当時でございました。井上侯爵というような、日本では元勳ともいふべき人が、朝鮮に公使となつていかれたにも拘らず、日本の地歩というものは、ほとんど寸分達せられなかつた次第であります。その後、後の小村侯爵も朝鮮にいかれたのでありますが、いかんとも手の出しようがなかつたような状況であります。

わたしが朝鮮に参つた当時は、ちょうどロシアが満洲方面に主に手を伸ばそうという時期であつて、それがために朝鮮においては、いささか日本に譲るところがあつてもよいというような態度を示したことでありましたが、朝鮮における日本の状況というものは、まだ進んでことをなさうというまでには運んでいなかつたような状態にあつたのであります。

そこで日本といたしましては、またわたしといたしましては、到底免れえないと思うところのロシアとの衝

丸山重俊 121, 247
 満洲事変 251
 満洲鉄道 150, 151
 満鉄 149, 150 →南満鉄
 陸奥広吉 138
 陸奥宗光 50, 52
 目賀田種太郎 121, 122, 137, 247
 本野一郎 180-182

や 行

矢野文雄 56-58, 68, 70-72
 山県有朋 64, 80, 81, 88
 山川健次郎 212, 213
 山座円次郎 76, 79, 142, 143
 山本権兵衛 77, 80, 82, 83
 楊鋭 61

ら 行

李完用 130
 陸宗輿 180, 181
 李鴻章 58, 59, 64-67
 劉光第 61
 梁啓超 59-65, 221
 林旭 61
 ルーズベルト 123, 124, 134, 248
 黎元洪 184, 185
 ロイド・ジョージ 199, 203, 206, 207
 ローザンヌ会議 200
 ロンドン会議 209, 226

わ 行

ワシントン会議 206, 207, 225, 231
 渡辺洪基 35-37

阪谷芳郎 93
 三国干涉 114, 115, 135, 239, 250
 幣原喜重郎 188
 シフ 150
 渋沢栄一 87, 90, 96
 下村宏 108
 徐世昌 179, 180
 杉浦俊香 213, 216
 鈴木貫太郎 48
 スティーブンス 121, 247
 征韓論 29, 249
 盛宣懷 67
 西太后（皇太后） 59-61, 67
 曹汝霖 178, 180
 曾禰荒助 90, 91, 94

た 行

竜丸事件 151, 153, 154
 田中義一 171, 172, 183, 184
 田中次郎 108
 田村怡与造 74, 75, 77, 84, 240, 241
 段祺瑞 171-173, 178, 179, 185-188
 譚嗣同 61
 団匪事件／騒動 67, 71, 72, 163
 端方 231
 チェンバレン, ジョセフ 201, 202
 チェンバレン, ネヴィル 201
 張蔭桓 59, 60, 65-67
 張勳 179, 180, 183-186
 珍田捨巳 189, 229
 都筑馨六 36, 72
 鄭家屯事件 175, 177, 178
 寺内正毅 133, 149, 171, 181, 182, 226
 統監府 134-136
 東郷平八郎 50
 董福祥 69

な 行

長岡外史 74, 77, 240
 南満鉄道 149, 150 →満鉄
 西徳二郎 54-56
 二十一か条要求／問題 223, 224

日英同盟 201, 204-206, 221, 223, 224
 日露戦争 85, 91, 92, 121, 123, 131, 132, 144, 146, 149, 218, 219, 224, 226, 251
 日清戦争 46, 49, 50, 59, 67, 83, 86, 114, 135, 191, 220, 249
 乃木希典 189
 ノックス 151

は 行

バークス 47
 バークンヘッド 204-206
 パート 65
 迫間房太郎 78, 83
 長谷川好道 127
 鳩山和夫 42, 43
 パブロフ 118
 原敬 115, 187-189
 ハリマン 150
 フォッシュュ 206, 207
 福島安正 74, 77, 240
 ブラウン 85-90, 136-140
 フレンチ 204
 ヘイ 223
 平和会議（ハーグ） 134
 平和会議（パリ） 225
 北京条約 144, 150
 北京談判 146, 148, 149
 辺見十郎太 28
 ポアンカレ 198, 199
 朴泳孝 135, 249
 北清事変 221
 朴齊純 77-79, 83, 84, 130
 ホルランド 51

ま 行

牧野伸顕 212, 213
 マクトナルド 197, 198
 馬山浦事件 83, 241
 松石安治 102, 103, 244, 245
 松方幸次郎 35
 松川敏胤 100, 244

索引

あ 行

青木周蔵 51, 72, 80
秋月左都夫 97
浅田徳則 43
アスキス 195, 196, 207
アスキス夫人 195, 196
井口省吾 100, 244
石井菊次郎 57, 58, 197, 231
伊地知孝介 106, 108, 109, 246
伊集院彦吉 142, 143, 147, 148, 178
イズヴォルスキー 121, 243
伊東祐享 45, 46
伊藤博文 56-63, 65, 66, 68, 72, 73,
80-82, 86, 88, 120, 121, 125-136,
154, 155, 242, 250
犬養毅 188
井上馨 36, 67, 73, 81, 114, 115, 118-
120, 150, 239, 243
内田康哉 136, 187, 188
瓜生艦隊 110, 111, 246
瓜生外吉 106, 108
栄禄 61, 67
榎本武揚 50
エリオ 196, 198
袁世凱 49, 61, 63, 67, 131, 135, 147-
149, 170-172, 179, 180, 249
欧洲大戦 158, 200, 222-226
汪大燮 180
大浦兼武 149
大隈重信 47, 56, 57, 63, 95, 96, 160,
169-171
大谷喜久蔵 92, 93
岡田啓介 203
尾崎斉 218, 219
小田柿捨次郎 94, 228

小田切万寿之助 186, 187
小幡酉吉 177, 188

か 行

カーゾン 203, 204, 206-208
桂太郎 121-124, 154, 155, 248
加藤高明 47, 118-121, 136, 243
加藤増雄 115-117
樺山資紀 31, 35, 46
川上操六 27-29, 84
韓圭尚 129
韓国保護条約 126, 134, 135, 248-250
間島 131-134, 143, 144
機会均等 223
木越安綱 92, 105, 108, 111, 246
金玉均 135, 249
錦州鉄道 151
久原房之介 173
グレー 202, 203
黒木為楨 218
京津鉄道 98
慶親王 65
京釜鉄道 81, 97, 98
康有為 61-64
呉大澂 131
児玉実文 26-31, 33-36
後藤新平 154
小村寿太郎 54-56, 90, 95, 96, 106,
108, 115, 120-125, 149, 150, 239,
243, 245, 248, 250, 251

さ 行

西郷隆盛 29, 30, 32
斎藤実 82